



メダル級整備ミリ単位

ク・シドニー大会から正式種目に。競技用に強化された車いす同士でのタックルも認められており、その激しさから「マードール(殺人球技)」と呼ばれたこともある。障害の重い選手が守備を、軽い選手が攻撃を担うことが多い。プレーの迫力やスピード、パスの正確さに加え、障害の重い選手が車いすをうまく操作して相手の攻撃を封じ込める動きも見所の一つ。国内の競技人口は約100人。

相手タックルの衝撃で、車いすのホイールを支えるスポークが10本も折れていた。想像以上にひどい。直せないかもしれない。今月19日、千葉市での車いすラグビーの国際大会。日本チームのメカニック担当・三山慧(30)は主力選手の車いすを見て、がくぜんとした。別種のスペアホイールもあったが、「転がりがいいので、これを使いたい」という選手の思いに応えなかった。次の米国戦は翌日の正午。三山は翌朝一番で部品を調達し、通常なら2時間かかる修理を半分の時間で終え、間に合わせた。試合後、チームの勝利に貢献した主力選手が声を掛けてくれた。「前より調子が良くなったよ」

車いすラグビー メカニック担当 三山 慧 30



選手の車いすをチェックする三山さん(20日、千葉市で)

ち込む人を冷めた目で見るようになった。転機は大学1年だった。2005年9月。バイク事故で左足を骨折し、入院先の病院で出会ったのが、後に日本代表となる官野一彦(34)だった。

故で頸椎を損傷し、胸から下に力が入らなくなった。それでも、「退院したらパラリンピックに出場したい」と熱く語る姿に、胸が高鳴った。「普通の生活すら大変なのに、はるかに上を目指している」

官野はサーフィン中の事 退院後、東京のチームで

素早く修理 技術磨く



相手チームの選手からタックルを受けながらゴールする選手(右)

強化車いすで 激しくタックル

ウィルチェアーラグビーとも言い、四肢に障害がある選手が1チーム4人で、バスケットボールと同じサイズのコートでプレーする。専用ボールを持った選手の車いすが相手側ゴールラインを越えると得点になる。

1977年にカナダで考案され、2000年のパラリンピッ

車いすラグビーを始めていた官野に誘われ、練習を見学した。疾走し、激しくぶつかり合っても壊れない競技用車いすに興味を持った。08年の北京大会後、ニュージーランドへ渡り、メーカーでも半年間、本場の技師に整備方法を学んだ。

07年11月、日本チームのスタッフとしてシドニーでの国際大会に同行した。試合中に壊れた車いすを素早く修理する外国人のメカニック担当者を見て、「あんなふうになりたい」と決意した。

車いす製造工場アルバイトを始め、車いすの構造を頭にたたき込んだ。専属メダルを逃し、官野とともに12年のロンドン大会では

メダルを逃し、官野とともに12年のロンドン大会ではメダルを取って一緒に喜ぶだけ(敬称略)